

## 乳幼児のための舞台芸術活動に重要な要素とは？

—ベイベー・ミーツ・シアター ☺ の実践をもとに—

古賀弥生 田上豊

### What are the Important Elements of Performing Arts Activities for Infants? :

Based on the Case of “Baby Meets Theater ☺”

KOGA Yayoi TANOUE Yutaka

#### Abstract

In this paper, we have clarified the important elements of the practical program for performing arts activities for infants by comparing the knowledge accumulated from past activities in Japan with the “Baby Meets Theater ☺” held in Yabu City, Hyogo Prefecture.

From the previous cases, the three points are extracted as important elements for the practice program. (1) Provide a variety of stimuli to infants (2) Include theatrical playfulness (3) Emphasis on a sense of unity between parents and infants.

In addition, the following three points have been confirmed by this practice. (1) Creating a comfortable environment. (2) Giving them something that can be used in their daily lives. (3) Recognizing the circumstance of the region.

**Key words:** Baby Theater, Arts for infants, Playfulness of Drama, Parent-child involvement, Interaction with others.

(2024年3月2日受付, 2024年7月31日受理, 2024年9月30日発行)

### 1. はじめに

日本国内における乳幼児向け舞台芸術の創作と上演は、10数年前から各地で盛んに展開されるようになってきている。乳幼児向け舞台芸術の呼称は、「ベイベードラマ」「ベイベーシアター」など様々で、対象も1歳半程度までの「赤ちゃん」を対象としたものから3歳程度の幼児対象まで、また子どもを鑑賞者と位置付けたものと親子のコミュニケーションに主眼を置いたワークショップ形式のものなど内容も多彩に実施されている。少子化が進む中、子どもを育む活動への関心や、舞台芸術のコミュニケー

ションに関わる力への注目の高まりを背景に、乳幼児のための舞台芸術活動は今後も多様な展開が進むものと思われるが、具体的なプログラム構築の手法等は、研究の途上にある。

本稿では、日本国内におけるこれまでの実践活動から蓄積された知見に、兵庫県養父市で実施された「ベイベー・ミーツ・シアター☺」を重ねて検証することにより、乳幼児のための舞台芸術活動の実践プログラム、特にワークショップ型のプログラムについて、その重要な要素を明らかにし、今後の研究と実践活動に貢献することを目指す。

なお本稿においては、乳幼児のための舞台芸術

活動を「ベイベーシアター」と称する。またベイベーシアターの対象である「乳幼児」の年齢については、1歳未満の児童を「乳児」、満1歳から小学校就学前を「幼児」とする児童福祉法第4条の規定をもととする。

## 2. ベイベーシアターの日本における展開

まず、ベイベーシアターの日本における状況を概観すると、日本では2010年代後半から実践やそれに伴う実践者向け研究会などが盛んに行われるようになっており、上演される作品が増加している。

このような動きを反映して、児童・青少年演劇ジャーナル「げき」では複数回にわたってベイベーシアターに関連する特集を組んでおり<sup>1)</sup>、これらの記事には海外事例や海外の実践者、研究者を招いたセミナー等の記録も含まれている。

国内外におけるベイベーシアターの展開については、浅野(2023)及び上述の雑誌「げき」27号(2024年)の特集「ベイベーシアター」が概要をまとめている。浅野によれば、確認されている最初の乳児向け舞台芸術作品は1987年にイタリアで制作・上演された劇団バラッカ(La Baracca)による『みず』で、3歳児までを対象としたものであったという。このほかスウェーデン、フランスで90年代前半までの初期の動きがあり、これらを皮切りにイギリス(スコットランド)、デンマーク、ポーランド、セルビア、シンガポール、韓国などへの広がりが見られる。

日本国内では1995年、劇団風の子九州(福岡市)による作品『ピーかぶー』が、0～4歳児と明確に乳児を対象として設定した最初の試みとされている。

国内外の初期の動きに共通するのは、劇団などの創造団体だけでなく保育・教育・子育て支援など乳幼児に関わる専門家等が関わったことであると浅野は述べており、ベイベーシアターが舞台芸術の新たな領域であると同時に地域の福祉に直結するものであることを指摘している。

その後2000年代に入り、国内における展開は子育て支援・保護者支援の一環として新たな段階に

入る。子ども劇場・親子劇場等による取り組みと発展を経て2010年代には実践が各地に広がり、海外の先進事例を積極的に取り入れる動き、創造団体やアーティストが集結した組織的な取り組み<sup>2)</sup>が始まる。そして2020年代は、コロナ禍の影響も受けつつより安全な上演のためのガイドラインづくりなどが行われ、演劇分野だけでなくコンテンポラリーダンスなどの分野でも乳幼児を対象とした舞台芸術活動が展開されるようになってきている。近年の作品では、舞台芸術のジャンルだけでなく様々な内容が含まれており、乳幼児親子が「観る」ことにとどまらず「参加する」ことも包含するワークショップ型のものも見られる。

このような動きを背景として、実践者、コーディネーター、研究者等が集まり、ベイベーシアターの質的向上、社会的認知の向上などを目的とした活動を行う一般社団法人ベイベーシアターネットワーク<sup>3)</sup>が2022年に設立されている。

日本におけるベイベーシアターは、舞台芸術の一領域であるだけでなく子育て支援と関連して社会的認知を高めてきた。

芸術文化と子育て支援については、古賀(2012)がソーシャル・キャピタル形成の視点から論じ、芸術文化鑑賞や体験の機会を通じた結束型ソーシャル・キャピタルの蓄積が子育て中の人々の孤独感を低減させる有効性と、多様な表現や価値観を受容する芸術文化活動が結束型ソーシャル・キャピタルの難点のひとつである排他性を抑える可能性を指摘している。

しかしながら、乳幼児を対象とした芸術文化活動の社会包摂など多様な領域における展開は、いまだその有用性に関する丁寧な検証が求められる段階である。特に、乳幼児のための作品創作やワークショップ型の活動におけるプログラム構築に一定の科学的裏付けを付加していく実践と研究の蓄積が必要とされており、本稿はその一端を担うものである。

### 3. 実践プログラムに関する先行研究

#### ～アーティストは何を重視してプログラムを立案しているのか～

ベイビーシアターの実践プログラムについては、現場での実践から得られた知見はあるものの、研究成果として公開されているものは少ない。

その数少ない先行研究として挙げられるのが、日本児童・青少年演劇劇団協同組合による「ベイビードラマの創造・開発・運用のための調査・研究報告書」(2016年)である<sup>4)</sup>。この報告書のなかで、首都圏における乳幼児とその保護者を対象とした舞台芸術作品の創作・上演の実践から重要な要素を抽出した『「はじめてのおしばい」に取り組む際に大切なこと」がまとめられており、2023年に一部改訂された内容が「げき」27号(p10)に掲載されている(以下、「げき」27号p10より引用)。

\*\*\*\*\*

- ・対象を知る／乳幼児とはどんな人か、今日、彼らの育ちの場はどの様なものであるかを知ること
- ・基本的見地／安全・安心な場であり、観る場所、環境として「相応しい」こと  
表現者はその年齢の人たちの前に立つ人として「相応しい」こと
- ・テーマ／基本的信頼獲得の場であること  
親(保護者)ではない人との「はじめてなのであい」、コミュニケーションの始まりの場であること  
表現したくなる心の動きが芽生えるところであること→その芽生えを必ず受け止めること
- ・作品づくり／提供されるストーリーは、あくまでも単純でわかりやすく、ドラマを見せることとは少し異なり、日常の不思議やおもしろさを伝えること  
ゆっくりであること→彼らの理解のペースを守り、じゃましないこと  
エンターテインメントとして届く表現であること

強い光や耳に刺さるような大音量ではなく、彼らの視力や聴力、脳の発達段階などを考慮すること

TVやビデオ等と違い、一方的に常に勝手に動いているようなものではないこと

・時間／集中の途切れない時間(20～30分程度)であること

・キャパシティ／観客と演じ手の距離について考え、キャパシティは、彼らの発信を受け止められる人数であること。

\*\*\*\*\*

上記のまとめは主として乳幼児を鑑賞者とした取り組みを対象としたものであるが、ベイビーシアターについては乳幼児親子が参加する要素が強いワークショップ型のものも包含する<sup>5)</sup>。

ワークショップ型の活動も含めた先行事例として筆者が関わった乳幼児のための舞台芸術作品づくりと、アーティストの養成を行う事業の実践例に触れたい<sup>6)</sup>。アーティスト養成は開催地域である福岡の地元アーティストを対象としたもので、東京や海外からこの分野での経験豊富なアーティストを招聘し続けるのでは作品上演を長期にわたり継続することが困難であることを背景に企画されたものであった。その内容は、乳幼児のために制作された舞台芸術作品(招聘作品)の鑑賞、ワークショップへの参加、乳幼児の芸術体験に関する脳科学の観点からの影響を学ぶレクチャー、参加アーティストが創作した作品の試演会、試演会作品に対する子どもの舞台芸術に関わる専門家からのアドバイス等のメニューが用意されていた。すでに10年以上の活動実績を重ねている中堅からベテランのアーティストが、乳幼児のための芸術体験の担い手となるべくステップアップを図る機会を提供する場であった。

筆者は、この養成の場に参加した7名のアーティストに研修成果を自ら振り返るインタビューを実施していた(2015年2,3月)。インタビューの目的はアーティストの成長に関する具体的な内容を明らかにすることであったが、質問から派生した語り

妨げない半構造化インタビューの手法をとったこともあり、作品創作の際に留意した点に関する語りも多く含まれていた。今回、当時のインタビュー記録からこの点をあらためて抜き出したところ、以下のような点が見出された。

\*\*\*\*\*

#### 【考え方・姿勢】

- ・創り手のやりたいことを押し付けることなく乳幼児に寄り添う。(それでいて)創り手にとってどうしても外せないこだわりは捨てない。
- ・親子間の感覚の共有を大切にする(互いの心地よさ、幸福感)

#### 【具体的な対応】

- ・低い姿勢
- ・大きな音、急な大きな動きを避ける
- ・さまざまな感覚に訴える

\*\*\*\*\*

これらの先行例を重ね合わせて、乳幼児親子のための舞台芸術活動、特にワークショップ型の活動における実践プログラムに重要な要素を抽出すると以下のようなことがいえる。

⇒(仮説)観せるだけでなく子どもの反応を受け止める。

五感への働きかけ。

「遊び」との組み合わせ。

親子の関わりを重視する

これらの仮説をもとに組み立てたプログラムの実践と検証を試みたのが本研究である。

上述の「げき」16号では、脳科学者でベイビードラマ研究の第一人者として日本に何度も招聘されている韓国のChang Eun Juの講演内容を浅野がまとめた記録も掲載されている<sup>7)</sup>。このなかで浅野はこの分野における今後の課題として「科学的根拠に基づいた実践の展開と集積」「実践と有機的に結びついた研究の推進」を挙げている。ベイビシアターの発展には、実践知と研究による根拠を共に蓄積することが重要であり、本研究の意義もここにあるといえよう。

## 4. ベイビー・ミーツ・シアター◎の 取り組み

「ベイビー・ミーツ・シアター◎」は、ダンサーで振付家の千代その子、演出家の田上豊、アートマネージャーの古賀弥生による乳幼児親子へのワークショップ活動を目的としたユニットである。ダンス、演劇、アートマネジメントの角度から地域活性化の方法を追求する同ユニットは、乳幼児親子向けのアウトリーチ企画として豊岡演劇祭2023にも参加した。

本章では兵庫県養父市で2023年の冬に実施した絵本の読み聞かせワークショップ(演劇)の実施例を元に、乳幼児親子向けのワークショップ・プログラムとその実践について解説・分析する。

### 4.1. ベイビー・ミーツ・シアター◎

#### 【絵本読み聞かせ編】の記録

本項では、実践したプログラムの概要を提示する。

【受け入れ団体】NPO法人子育て支援団体りとるめいと(実施場所の運営団体)

【実施場所】養父市子育て・移住サポートセンター(兵庫県養父市八鹿町八鹿1694番地1)

1階子育て広場室

【実施日時】2023年12月8日(金)11:00~11:40

【参加人数】乳幼児の親子(代理引率者の場合も含む)9組

子どもの年齢:6か月~2歳(6か月1名、7か月3名、8か月1名、9か月1名、1歳3か月1名、1歳4か月1名、2歳1名)

【目的】先行例から導いた仮説をもとに、以下の3点を目的として設定した。

- ①乳幼児の五感に働きかける読み聞かせを行う。
- ②保護者に向け、絵本を使った遊び方の方法を提示する。
- ③大人と子どもが一体となれる時間を創出する。

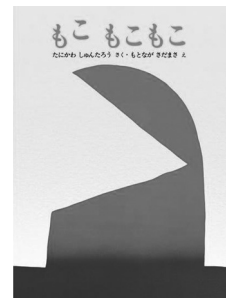


写真1 使用した絵本

【ファシリテーター及びコーディネーター】

- ・ 田上豊 (芸術文化観光専門職大学 助教)
- ・ 古賀弥生 (芸術文化観光専門職大学 教授)

【読み聞かせの使用絵本】

『もこもこ』作：谷川俊太郎、絵：元永定正、  
発行：文研出版

表1 乳幼児向け・絵本読み聞かせワークショップ・プログラムの記録

\*ここではファシリテーターを「講師」と表記

実施項目	実施内容	進行上の留意点	参加者の反応
0 イントロダクション	絵本の読み聞かせワークショップの企画概要と実施内容の説明、講師の自己紹介	所要時間や出入り自由である旨を伝えておく。	会場である「子育て広場室」の利用経験者が多いようで、場所には慣れている様子。
1 参加者の自己紹介回し	参加者（保護者）に一人ずつ自分の名前を言ってもらおう。その際に他の人全員でその名前を復唱してあげる。	緩やかな車座になり、来場した参加者と雑談をしながら、ゆるりと始める。	保護者はやや緊張している様子。
2 赤ちゃんの紹介	保護者が乳幼児を抱え、子どもの代わりに「名前は〇〇です、〇〇が大好きです」「〇〇です、今、〇〇を頑張っています」など、乳幼児の名前と合わせてなにか一言添える他己紹介を二周ほど回す。	乳幼児の名前が紹介された際は全員で復唱してあげる。赤ちゃんの紹介の度に講師がコメントを入れ、保護者とのコミュニケーションを図る。	子どもが〇〇できるようになった、などの紹介に保護者がうなずき合い笑い合っている。トイレでできた、という話には拍手がわく。
3 講師による読み聞かせ 絵本「もこもこ」	一枚ずつ絵本のページをめくりながら、様々な声色を使ってゆっくり一読してみせる。	乳幼児の反応を見ながら、声の音量やトーンを調整する。	講師が親子の近くに寄り個別に働きかけると、じっと見つめる子どもが多い。
4 参加者による読み聞かせ 絵本「もこもこ」	保護者に音読してもらおう。絵本のページに書かれている文字をいろんな声を使って読み聞かせてもらう。その際に乳幼児の身体の一部に触れ、優しく刺激を与えてもらう。	保護者からの読み聞かせを受けている乳幼児の様子、反応を観察する。	保護者は講師の声色を真似しながら読んでいる。保護者の「しーん」という声があると、それぞれに声を出していた子どもたちが一斉に静まる場面が何度かある。
5 小道具を使った読み聞かせ 絵本「もこもこ」	部屋の中にあるおもちゃを一つ選んでもらい、その道具が言っているかのように絵本内の擬音を発語し、乳幼児に刺激を与えてもらう。	保護者の選ぶおもちゃを観察し、その傾向を確認しておく。	1歳以上の子どもは室内にある大型遊具（乗って動かせるもの）に気持ちが向いている様子。
6 二人一組での読み聞かせ 絵本「もこもこ」	保護者が乳幼児を抱えた状態で親子同士ペアになって向き合う。保護者は目の前の他者の子どもに向かって「もこもこ」などの擬音を発しながら、その身体の一部を優しく触わり、刺激を与える。これを交互に双方行う。	自分の親以外に読み聞かせをされている乳幼児の様子、反応、また他者の子に声掛けを行う保護者たちの様子を観察する。	保護者は手に取れる小さなおもちゃを使い、隣の子どもの背中に触れたり、ほほをつついたりしている。
7 講師の小断 (妻の自宅出産エピソード)	講師の妻による自宅出産（3回）のエピソードを聞いてもらう。	自宅出産に立ち会った際の経験談を披露する。	保護者は興味深そうに反応しながら聴き入っている。
8 顔出しパネルを使用した 絵本「もこもこ」	大きな桃の形をした顔出しパネルを装着し、「もこもこもこ〜」と言いながら、乳幼児たちの元へ近寄ったり、離れたりする。	顔出しパネルで一人でも泣き出したら、すぐやめること。	パネルを怖がる子どもはおらず、じっと見つめている。講師がパネルの使用を勧めると1人の保護者が装着して我が子と向き合い、子どもが不思議そうに見上げている。
9 フィードバック・振り返り	ワークショップに参加した上での感想や、子育てに関することなどを雑談のような雰囲気の中で楽しく参加者全員でシェアする。	実施側から無闇にプライベートなことに踏み込んだ質問を投げかけない。	昼食時間が近づきすぎる子どもも出てきたため、保護者もそわそわし始めるが、講師の問いかけに応じて率直に感想を言葉にしている。

## 4.2. 実施プログラムについて

今回のワークショップでは、プログラムの軸として「絵本の読み聞かせ」を採用した。理由としては、まずファシリテーター自身の育児経験で培った読み聞かせのノウハウがあったことが大きい。その際に使用していた絵本が「もこもこ」で、この絵本は柔らかな絵と様々な擬音を中心に展開されるため、乳幼児の五感を刺激するのに最適だと考えた。絵本の読み聞かせという行為自体、子どもと保護者間のコミュニケーションを図る上で最適な方法であることは様々な乳幼児教育の文献に記されている通り<sup>8)</sup>だが、それに加え、本プログラムは、絵本の文字を発話し読み聞かせる保護者に対して演出家の視点でその遊び方(方法)を付与する目的があった。以上の理由によって絵本を軸としたプログラム構成を選択した次第である。

今回実施した乳幼児親子向けの実施プログラムでは、先行事例から抽出した以下の3つのポイントを軸に構成した。

- ①乳幼児に多彩な刺激を与える
- ②絵本の読み聞かせに演劇的な遊戯性を含ませる
- ③保護者と乳幼児の一体感を重視する

次に上記の3つのポイントに沿って、実施プログラムを振り返ってみる。

### ①乳幼児に多彩な刺激を与える

読み聞かせの取り組みの中で聴覚に加え、視覚、触覚にも訴えかける要素を足し、様々な刺激を乳幼児に与えられるよう工夫した。聴覚の場合、具体的には、

- ・講師→乳幼児
- ・保護者→乳幼児
- ・他者(別の保護者)→乳幼児

このように、読み手にバリエーションを持たせ、乳幼児の聞く「声」に変化をつけた。読み手が変われば、乳幼児にとっての視覚情報も変わる。そういった変化の中で乳幼児にとって、目の前の刺激(読み手の変化)が脅威を与えるものになっていないかを注意深く観察することも併せて必要不可欠だった。

### ②絵本の読み聞かせに演劇的な遊戯性を含ませる

保護者に対し、読み手における声の音域(振り



写真2 養父市子育て・移住サポートセンター外観  
(養父市HPより転載)



写真3 ベイビー・ミーツ・シアター®の様子①(筆者撮影)



写真4 ベイビー・ミーツ・シアター®の様子②  
(桃の顔出しパネル)(筆者撮影)

幅)の活用法、発語の抑揚の付け方、物を使用するパペット式など、様々なアプローチの方法を伝達した。読み聞かせの新しい方法を取得すれば、今後の読み聞かせの引き出しを増やすことに繋がる。こういった読み聞かせに関するノウハウは、育児を豊かにする生活向上の知恵ともいえる。遊び心をもつことで、読み手のモチベーションアップを期待した部分もある。

### ③保護者と乳幼児の一体感を重視する

何をもって一体感とするのかにもよるが、例えば、保護者が乳幼児に絵本の言葉を届け、体に触れて多角的に刺激を与える。すると、乳幼児から反応がある。中には声を出して喜ぶ乳幼児もいる。ここに一体感を見出したとして、それぞれの親子からにじみ出る楽しいな一体感は、空間全体を「安心できる場」に変容させていった。さらに、この安心感によって保護者は乳幼児にさらなる工夫で刺激（読み聞かせ）を与える、という流れが起きた。このことから、一体感を感じさせるコミュニケーション集積は、「空間全体」の雰囲気を決定的にすることを再確認した。

### 4.3. 参加者の感想

本実践では、実施後に参加した保護者の感想を記録した。ファシリテーターが保護者に問いかけ、発話を録音したものをテキスト化し要約したものを以下に記す。

- ・本の読み聞かせはできていなかったが、こういうふうにしたらいいのかとわかったので家でもやってみよう。ふだん、自分の子としか接していないので、よそのお子さんと関わってみて我が子と違う面も知ることができた。
- ・数カ月の赤ちゃんに絵本は早いと思っていたが、犬がわんわん、などの音に反応していて、音が好きなんだなと思った。
- ・家では読み聞かせはあまり聞いてくれない。いつも同じ、好みの本ばかり読んでいた。今日は新しい本を読むことができたし、子どもに声掛けをしながら読むやり方を教えてもらったのでやってみよう。
- ・自分は絵本を読みたいと思うが、子どもは動いてばかりで興味がないのかなと思っていた。擬音に喜ぶとわかったので家でもとり入れたい。
- ・家で「もこもこ」とか絵本を読みながら言っているが、マンツーマンでリアクションがないと寂しい。でも根気強く、自分が楽しんでやれば子どもの糧にもなるのかなと思った。

(隣の子とのふれあいについて) 隣の子はよく知っているが、普段は触れたりはしないので今日は反応してもらえてうれしかった。

- ・読み聞かせはするが、触れあいながらやったことはなかった。触れあうと反応がありよかった。
- ・うちの子はこの中で一番大きいので反応がよいなと思った。シーン、というときよく反応していてやっぱり言葉をかけると違うなと思った。一番印象に残ったのは桃。みんながいっせいに注目していてインパクトがあった。感動したのは全部自宅出産だったという話。
- ・家でじっくり絵本を読む機会はなく、今日は他の子たちとも一緒に読む経験ができていい刺激になったと思う。隣の子に話しかけるとじっと見てくれて、大きいお兄ちゃんの反応に対してうちの子も一緒に声を出したりしていた。

### 4.4. 実施後のファシリテーター所感

乳幼児親子に向けたワークショップを実施するにあたり、プログラム内容の吟味やファシリテーションの検証など様々な準備を行ったが、今回の場合、さらに不可欠だったのは養父市における乳幼児の育児環境を理解することだった。例えば、保育料が無料の養父市では子どもが1歳になると保育園に預けて働く保護者が多い。つまり子どもが1歳になるまでは各家庭の中で育児を行う世帯が多いことが予想される。そこから、保育園入園前の子どもを持つ人々のために自分の子ども以外の子どもたちの様子を見る、保護者同士のつながりを持つための機会を創出する、というコンセプトを見出した。同市では、毎年約100名程度の新生児が誕生するといわれている。今回のワークショップは、そのうちの約1割となる乳幼児の親子を集め、絵本を介した親子同士の関係性を深めてもらうための、いわば、人と人がつながり合うための交流プログラムだったともいえる。

実施後の参加者による反応を見る限り、一つひとつのアクティビティがきちんと機能したと感じている。乳幼児親子が対象の場合、やはり保護者と乳幼児にとって如何に心地の良い場を創出できるかが

鍵であり、これを実現するにはファシリテーター、コーディネーター、受け入れ側（今回はNPO法人子育て支援団体りとるめいと）がそれぞれの専門性をもってアイデアを出し合い、三位一体の姿勢で取り組むことが求められる。

## 5. 総括

本稿では、乳幼児親子のための舞台芸術活動、特にワークショップ型の活動における実践プログラムについて、その重要な要素を先行事例から抽出し、それをもとにプログラムを実施し検証を試みた。

その結果として、先行事例から抽出した3点の重要な要素を押さえることで実践の場の成立につながると確認することができた。

### 【先行事例から抽出した実践プログラムに重要な要素】

- ①乳幼児に多彩な刺激を与える
- ②絵本の読み聞かせに演劇的な遊戯性を含ませる
- ③保護者と乳幼児の一体感を重視する

これに加えて、今回の実践により以下の3点の重要性も認識できた。

### 【今回の実践から付加された重要な要素】

- ①心地よい環境を創出すること

参加者は会場の「子育て広場」利用者がほとんどであり、互いに顔見知りではあるものの必ずしも会話を交わす関係性ではなかったようである。ただし、会場の利用経験があるためか、子どもにとっては比較的なじみのある場所であり、プログラムへの導入が容易であった。また、それぞれの親子からにじみ出る温かな触れ合いの空気感が、同じ場を共有する他の親子にも伝わり合って相乗的な効果を生み出しており、その空気感を醸成する基盤として安心安全な環境を用意することの重要性が認識できた。

- ②日常に生かせるものを手渡すこと

保護者の感想の中には、「絵本は早いと思っていた」「擬音に喜ぶとわかった」などの声があり、本ワークショップに参加したことで日常生活に生かせる、子どもとの向き合い方のヒントを獲得したことがわかる。このように、催しに参加したひと時を楽

しむことに付加された気づきや日常への活用が可能なものを得られる機会となることが、参加のインセンティブにもなると思われる。

- ③地域の実態を知ること

近年、表現ワークショップについては「どのようにやるか」と共に「どこでやっているのか」を踏まえることの重要性が増している。故にワークショップを行う前にまず地域を知る必要がある。今回のプログラムを実施した養父市は、2024年版第12回住みたい田舎ベストランキング（宝島社）で子育て世代部門全国3位を獲得している。一方で1歳未満の乳幼児を持つ人たち同士はあまり関わり合いがない実態も一部存在する。そのため、プログラム内容は親子の関わりに加えて他の親子との交流も組み込んだ。保護者の感想にはその点を評価する声があり、実施の意義が確認された。今回の対象者は2020年から世界的に大きな影響を与えているコロナ禍に生まれてきた子どもたちであり、特に家族以外の他者とふれあう機会を制限されてきたという社会状況も考え合わせると、他の親子との交流の機会としても大きな意義があったものといえよう。

本実践からは、社会包摂の視点で地域を見つめ、対象や地域課題に合わせたオーダーメイドのプログラムを創出し続けることの重要性が再認識された。

一方、本稿で取り上げた実践例は、多様に広がっている乳幼児のための舞台芸術活動のなかのほんの一例に過ぎず、そこから導くことができることには限界があることはいままでもない。鑑賞型、ワークショップ型、その両方を含むものなど多様な取り組みについて、それぞれの特質に応じた分析が必要である。これまでに全国各地で展開されてきた実践活動への敬意を払いつつ今後も実践事例を積み上げ、検証方法の研究も重ねていきたい。

## 注

- 1) 同誌16号(2016) 17号(2017) 18号(2017) 20号(2018) 21号(2019) 27号(2024)などで特集、小特集が組まれている。
- 2) この例である日本児童・青少年演劇団協同組合の「ベイビードラマ部」が後に「ベイビーシアタープロジェクト」



- エクト」と名称を変更、これを前身として後述の一般社団法人ベイビーシアターネットワークへとつながる。
- 3) 一般社団法人ベイビーシアターネットワークWEBサイト参照。https://babytheatre.hp.peraichi.com/ 最終閲覧日：2024年3月2日
  - 4) 同報告書は公刊されておらず、発行者からPDFデータでの提供を受けた。
  - 5) 一般社団法人ベイビーシアターネットワークのWEBサイトでは、イベントスケジュールを「T = Theatre: ベイビーシアター」「W = Workshop: ワークショップ」「P = Play: あそび会など親子で参加できるもの」の3種に分けて掲載している。URL、閲覧日は注3) のとおり。
  - 6) 筆者は福岡市で活動するNPO法人子ども文化コミュニティによって2012年から実施された事業に成果検証等の役割で参画した。
  - 7) 浅野泰昌 (2016) 「(報告) ベイビードラマの可能性と課題～海外の事例に学ぶ」『げき』16号 (児童・青少年演劇ジャーナル「げき」編集委員会、pp.29-31) 参照。
  - 8) CiNiiで「絵本 親子 コミュニケーション」というキーワードを入力し検索すると、2020年以降に限定しても13件の論文がヒットする (2024年2月26日確認)。

## 文献

- 浅野泰昌 (2023) 「日本における乳児向け舞台芸術の動向」『子ども社会研究』29号、pp.225-242
- 田舎暮らしの本編集部 (2024) 「田舎暮らしの本」2024年2月号、宝島社
- 古賀弥生 (2012) 「芸術文化事業によるソーシャル・キャピタルの向上に関する予備的考察～芸術文化と子育て支援の接点創出に向けて～」『活水日文』第54号、活水学院現代日本文化学会、pp.左17～左28
- 古賀弥生 (2012) 「芸術文化事業の意義に関する考察～『はじめての芸術との出会い』事業を例として～」『活水論文集』第55集、活水女子大学文学部、pp.68-88
- 古賀弥生 (2014) 「芸術文化事業の意義に関する考察Ⅱ～乳幼児のための『はじめての芸術との出会い』事業3年間の取り組みを例として～」『活水論文集』第57集、活水女子大学文学部、pp.91-109
- 児童・青少年演劇ジャーナル「げき」編集委員会『げき』16号 (2016) 17号 (2017) 18号 (2017) 20号 (2018) 27号 (2024)、晩成書房
- 日本児童・青少年演劇劇団協同組合 (2016) 「ベイビードラマの創造・開発・運用についての調査・研究報告書」